

燐光群公演「バートルビーズ」

堀上 謙

HORIGAMI Ken

昨年、下北沢ザ・スズナリで上演された、坂手洋二作・演出、演劇集団「燐光群」の舞台「バートルビーズ」を観てきた（15・9・6日所見）。この作品、アメリカの国民作家 ハーマン・メルウィルの『白鯨』と並ぶ代表作『バートルビー』（1853年刊）を脚色したものの。バートルビーは本作の主人公の名前。内容の不条理性からカフカを先 駆けた作品とも言われ、「不条理な状況において棲息を余儀なくされる、近代の人間のありようを象徴するもの」と言及されている。ブランショ、デリダ、ドゥルーズなどの現代思想家にも様々なインスピレーションを与えた作品でもあるのだ。150年前当時日本は江戸時代、舞台はアメリカ・ニューヨークでの物語である。

ウォール街で法律事務所を営む所長が語り手として登場。仕事が増えてきたため新たに書記を雇うことにする。バートルビーズである。彼は温厚で品格があるがどこか生気に欠けている青年。当初は、能率よく役目をこなしていたが、ある時所長に頼まれて口述を頼まれると、「できれば私、そうしないほうがいいのです」と言って、再三の頼みを拒みやがて一切の仕事を通り越すので解雇する。しかし、彼は事務所に居座り立ち退かず、挙げ句刑務所に送られる。だが、頑として態度を変えず食事まで拒み、ひそかに息絶える。〈逃避か、拒否か、怠惰か、絶望か〉彼の選択には、いかなる言葉も当てはまらないのだ。

坂手作品は、この不条理な「バートルビー的人間」を、現代人の象徴として普遍的に捉え直すことにより、新たな物語を演劇として紡ぎ出した。その方法として、所長を3・11後も原発から22キロ地点に踏み留まり治療する、福島県広野町の高野病院の事務長をモデルとした人物に置き換え、福島第一原発事故の後遺症である被爆・汚染物など現実を様々な事例で検証する。

かつて町に張られていたPR看板『原子力は明るい未来を開くエネルギー』を撤去するか残すかの論議もその一つである。この芝居、明らかに『反原発』をアピールする作品なのである。語り手の事務長役・大西孝洋、複数のバートルビーズほか燐光群の役者たちの朗唱劇的な構成は、音楽による転換の演出も成功、重奏する二時間半の幕のないドラマを渋滞することなく観せてくれた。

(元・『能楽ジャーナル』編集長)

(received Nov. 2015)